国生みの始めの島

辻　憲男（文学部教授）

百人一首の神戸ゆかりの歌というと、「淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝ざめぬ須磨の関守」である。千鳥の悲しい声と旅愁、光源氏の流寓の物語が重なる。対岸は、「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」の松帆崎。藤原定家はこの、待つ恋に身をこがす女の歌を自選した。

王朝貴族と違って、万葉びとの旅は現実感がある。須磨の製塩の煙を見、民の漁労を思った。柿本人麻呂は野島を過ぎ、西浦に出漁する舟を遠望した（南あわじ市慶野松原）。船上から明石海峡の門のような地形をながめ、はるか神代の国生みを幻想したこともある。

イザナキ・イザナミの二神が、矛（ほこ）で海水をかき回し、その先からしたたり落ちた塩がオノゴロ島になった。そこへ降りて、大きな御殿を建てて結婚した。御柱の周りを左と右から回り、出会ったところで唱え言の儀式をした。国生みの始めは淡路島、次に四国、隠岐、九州、壱岐、対馬、佐渡と生んで、最後に本州を生んだ。四国と九州はそれぞれ四面あって、男子・女子の別名がついている（古事記）。北海道は圏外である。播磨灘から大阪湾、紀伊水道までをわが庭とした海人（あま）族が、このような神話の原型をつくったのだという。日本書紀の一書には、淡路島は第一子というのでなく、他の島々を生む胞衣（えな）になったとある。そちらが本来の伝承であったのかもしれない。

明石海峡大橋と移情閣。神戸・舞子公園から淡路島を。